

平成 17 年 8 月 1 日	病害虫発生予報 8 月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
--------------------	-------------------------------	------------------------

安心・安全な農作物は、農薬使用の記録と農薬使用基準の遵守から！
農薬の総使用回数は「有効成分」で規制されます
< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
水稻：いもち病(穂いもち)，斑点米カメムシ類	1
水稻：イネツトムシ	2
サツマイモ：ナカジロシタバ	2
ナシ：ナシヒメシンクイ，ハダニ類	3
クリ：モモノゴマダラノメイガ	3
果樹共通(カキ，リンゴ)：カメムシ類	4
秋冬ネギ：ネギアザミウマ	4
抑制トマト：ミカンキイロアザミウマ	5
共通害虫：オオタバコガ	5
【その他の病害虫】	6
水稻，ダイズ，ナシ，カキ，クリ，秋冬ネギ，夏秋ナス，抑制トマト	
アブラナ科野菜共通，共通害虫	
II. 病害虫ミニ情報	
サツマイモのナカジロシタバの発生生態と防除対策	7
野菜・花きを加害するオオタバコガについて	8
農薬登録速報(6月)の概要	10
III. 病害虫資料室	
今月号の病害虫から	11
IV. 今月の気象予報	
12	
V. テレホンサービス	
12	
☆普通作物	0 2 9 (2 2 6) 5 3 2 1
☆園芸作物	0 2 9 (2 2 6) 6 1 3 1
<p>本文に記載された農薬の登録内容は、平成 17 年 8 月 1 日現在のものです。 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用基準、注意事項等を確認してください。</p>	
<p>詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病害虫防除所 Tel : 029-227-2445 予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス http://www.jpnpn.ne.jp/ibaraki/</p>	

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. いもち病（穂いもち）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや遅い	やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、穂いもちの伝染源となる葉いもちの発病度は平年よりやや少～少ない（表1）。
- ② 気象予報によると、出穂期の気温、降水量ともに平年並と予想されており、発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 葉いもちが多発して上位葉に進展している場合、または出穂期に降雨が続いた場合に穂いもちの防除を行う。
- ② 穂いもちの防除適期は穂ばらみ期（出穂直前）と穂揃期の2回である。
- ③ 防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

表1 葉いもちの発生状況（7月下旬調査）

	葉いもち発病度			発生地点率（%）		
	本年	前年	平年	本年	前年	平年
県北	7.5	12.1	14.4	73	90	85
鹿行	4.0	0.2	6.2	33	17	41
県南	1.4	0.1	3.2	10	5	33
県西	0.1	0.4	1.7	9	27	18
全県	4.2	5.4	4.9	41	47	43

2. 斑点米カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、水田周辺のイネ科雑草地において、本県の優占種であるクモヘリカメムシの発生が確認されており、平年並の発生である（表1）。
- ② 一部水田ではカメムシ類の侵入が認められている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 周辺よりも出穂の早い水田では成虫の飛来が集中しやすい。また、出穂の遅い水田では周辺の水田等で増殖した新成虫が侵入することがあるので発生には十分注意する。陸稲においても、水稲と同様に発生に注意する。

(斑点米カメムシ類 続き)

- ② 斑点米カメムシ類の防除適期は、成虫を対象とした穂揃期と、幼虫を対象とした出穂 20 日後位までである。
- ③ 穂ぞろい期に多数の成虫を確認した場合は防除を実施する。その後は幼虫の発生を確認した場合に防除を行う。本年のクモヘリカメムシ幼虫の防除適期は、8 月初めに収穫するコシヒカリで、県南・県西地域では 8 月 10 日頃、県北・鹿行地域では 8 月 15 日～20 日頃である。
- ④ 成虫および若齢幼虫が主体の場合は残効の長いシラフルオフェン剤 (MR. ジョーカー) 等を用い、中・老齢幼虫が主体の場合は ME P 剤 (スミチオン) 等を用いる。防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。

表 1 水田周辺のイネ科雑草におけるクモヘリカメムシの発生程度別地点数 (7 月下旬)

調査年次	H12	H13	H14	H15	H16	平年	H17
調査地点数	70	70	70	70	70	70	70
50 頭以上 (甚)	1	2	2	1	2	2	0
31～50 (多)	2	2	0	0	2	1	2
11～30 (中)	1	2	0	0	2	1	1
1～10 (少)	5	9	8	5	14	7	3
0 (無)	61	55	60	64	50	60	64
発生地点率 (%)	13	21	14	9	29	14	9
10 回振り虫数 (頭)	2.5	4.0	5.9	1.4	3.8	3.5	1.4

3. イネツトムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 第 1 世代幼虫の発生量は県北地域で平年並、鹿行地域でやや多く、県南・県西地域で平年より多い発生であった。

[防除上注意すべき事項]

- ① 7 月下旬から発生する第 2 世代幼虫を対象に防除を行う。水田をよく観察し、発生が多い場合は、幼虫が小さいうち (幼虫がイネの葉先を巻き始めた時期) に薬剤防除を実施する。
- ② 周辺に比べて田植えが遅かった水田、葉色の濃い水田、飼料イネでは発生に注意する。

※平成 17 年 7 月 13 日発表の病害虫情報 (No. 3) 参照

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7 月下旬現在、被害葉率は平年並である。

(ナカジロシタバ続き)

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害の大きい第3世代幼虫は、8月下旬頃から発生すると予想される。老齢幼虫になると防除効果が劣るので、幼虫発生初期(つる先や上位葉に指先ほどの穴が開いた食害痕が点々と認められる)の防除に努める。
- ② 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までかかるよう丁寧に行う。

(p. 7 病害虫ミニ情報参照)

ナ シ

1. ナシヒメシンクイ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、被害果率は平年並～やや高い。
- ② 7月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、平年並～やや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤散布は、幼虫が若齢である8月上旬に、収穫前日数に注意して行う。

2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、寄生葉率及び発生地点率は、平年並～やや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は、発生が多くなると防除が困難となるため、収穫前日数に注意したうえで、発生初期に防除を行う。
- ② 薬剤抵抗性ハダニ類の出現を避けるため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- ③ カメムシ類およびシンクイムシ類を対象に合成ピレスロイド系剤を散布すると、ハダニ類やカイガラムシ類が増加する場合がありますので、合成ピレスロイド系剤の散布回数は最小限に抑える。

ク リ

1. モモノゴマダラノメイガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

(モモノゴマダラノメイガ続き)

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、被害果率は平年より高い。
- ② 7月下旬現在、予察灯(かすみがうら市)への誘殺数は、過去3年中最も多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 被害が見られる園では、第2回成虫の発生時期となる8月上～中旬に、収穫前日数に注意して防除を行う。
- ② 被害の発生しやすい品種(神峰等)では、特に注意する。

果樹共通(カキ, リンゴ)

1. 果樹カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
第2回成虫： やや遅い	少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 予察灯(かすみがうら市, 龍ヶ崎市)への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年より少ない。
- ② 7月下旬現在、ナシにおける被害果率は平年よりやや低い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 果樹園内でカメムシ類が飛来した場合は、収穫前日数に注意したうえで直ちに防除を行う。
- ② 薬剤散布は、カメムシ類の活動が鈍い早朝に行う。

秋冬ネギ

1. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、秋冬ネギに隣接している夏ネギにおける被害度は平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう1ヶ月は、気温が平年並か高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 高温乾燥条件が続くと増殖が盛んになるため、発生状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布量は、生育初期は10a当たり1500、中期以降は2500を目安にし、丁寧に散布する。
- ③ 雑草はネギアザミウマの発生源となるため、圃場周辺の除草を徹底する。

(p. 11 病害虫資料室参照)

抑制トマト

1. ミカンキイロアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、本種の発生地点率は67%と高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 本種は、ヒラズハナアザミウマと同様にトマト黄化えそウイルス(TSWV)を媒介するため、発生を認めた場合は直ちに防除する。なお、ミカンキイロアザミウマは、花よりも葉に寄生している場合が多いので、葉をよく観察する。
- ② 黄化えそ病の発病株を認めた場合は、直ちに抜き取り土中に埋めるなどして処分する。
- ③ 薬剤散布は、葉裏にも十分かかるよう丁寧に行う。また、薬剤を選択する際は、農薬使用基準に十分注意する。

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 7月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、水戸市で平年よりやや多く、坂東市で平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう1ヶ月は、気温が平年並か高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 圃場をよく観察し、幼虫の早期発見に努める。齢期が進むにしたがって薬剤の効果は低くなり、中齢幼虫になると果実や結球内に食入するため、食入前の若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、葉裏や株元にも薬液がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤は連用しない。

(p.8 病害虫ミニ情報参照)

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	紋枯病	発生量：やや少	7月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
	セジロウンカ	発生量：少	7月下旬現在，県内の水田における発生量は少ない。
	ニカメイガ	発生量：やや多	7月下旬現在，発生量はやや多い。
ダイズ	鱗翅目幼虫	発生量：やや多	7月下旬現在，平年並の発生であるが，向こう1ヶ月間は発生を助長する気象条件である。
	カメムシ類	発生量：平年並	7月下旬現在，平年並の発生である。予察灯への誘殺数は，平年よりやや少ない。
ナシ	黒星病	発生量： (県南・県西地域) 平年並 ----- (県北地域) やや少	発病している果実及び葉は，伝染源となるため見つけ次第取り除き，土中深く埋めるなどして処分する。
	ハマキムシ類	発生量：平年並	7月下旬現在，平年並の発生である。
カキ	カキノヘタムシガ	発生量：平年並	7月下旬から8月上旬にかけて第2回成虫が発生するので，8月上中旬に次世代の若齢幼虫を防除する。
クリ	ネスジキノカワガ	発生量：やや少	7月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
秋冬ネギ	ネギハモグリバエ	発生量：平年並	7月下旬現在，夏ネギでの発生は平年並である。 (p. 11 病害虫資料室参照)
夏秋ナス	ハダニ類	発生量：やや多	7月下旬現在，平年よりやや多い発生である。多発すると防除が困難になるため，発生初期の防除を徹底する。
	マメハモグリバエ	発生量：やや多	7月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ミカンキイロアザミウマ	発生量：やや多	7月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ミナミキイロアザミウマ	発生量：平年並	7月下旬現在，平年並の発生である。
抑制トマト	コナジラミ類	発生量：平年並	7月下旬現在，調査地点の67%で成虫の発生を確認した。
アブラナ科 野菜共通	ハイマダラノメイガ	発生量：平年並	7月下旬現在，おとり作物（岩間町）による調査で寄生を確認している。
共通害虫	ハスモンヨトウ	発生量：平年並	7月下旬現在，平年並の発生である。フェロモントラップへの誘殺数も，平年並に推移している。

II. 病害虫ミニ情報

サツマイモのナカジロシタバの発生生態と防除対策

ナカジロシタバは、幼虫がサツマイモの葉を食害します。多発すると、短期間で葉柄だけを残して葉を食べ尽くすこともあり、サツマイモの収量・品質低下につながりますので、初期の発生に注意して早めに防除を行うことが重要です。

1. ナカジロシタバの発生生態

ナカジロシタバは、年3回発生し、発生量は8月以降に発生する第3世代幼虫が最も多くなります。孵化した幼虫は葉の裏に生息して摂食し、若齢幼虫はつる先の若い葉を好んで食害します。中～老齢幼虫になると、昼間は茎葉の陰などにひそみ、夜間に活動して葉を暴食するようになり、食べ尽くすと、餌を求めて隣接する圃場へ移動します。成熟した幼虫は土中に潜って土マユを作り、その中で蛹になります。

2. 発生状況

ナカジロシタバは、例年8月下旬から9月にかけて食害量が増加します(図1)。夏期の気温が高い年は発生が多く、平年より気温が低い年には発生が少ない傾向にあります。本年は、7月末現在、平年並の発生ですが、8月の気温は平年並か高いと予想されています。8月下旬頃に発生する幼虫に注意してください。

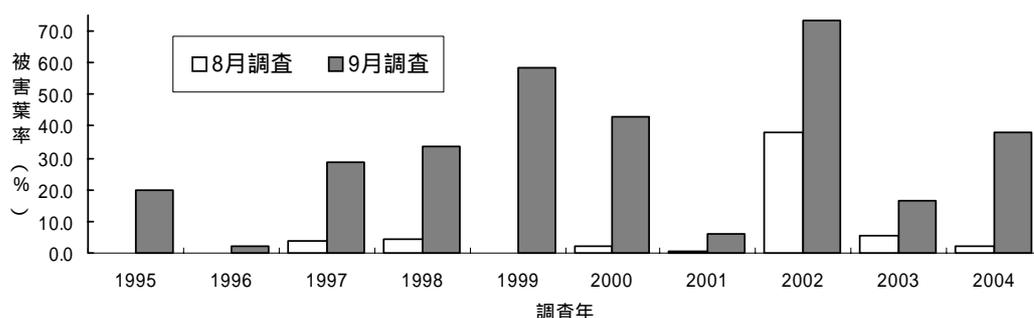


図1 過去10年間のナカジロシタバ被害葉率

3. 防除対策

圃場での発生の様子をよく観察し、防除効果が高い幼虫発生初期(若～中齢幼虫が発生の主体で、つる先や上位葉に指先ほどの穴が開いた食害痕が点々と認められる時期)に薬剤散布を行います。その際、幼虫が生息する葉裏まで薬剤がかかるよう丁寧に散布してください。

薬剤に対する抵抗性は現在のところ認められていないので、表1に示す薬剤を適期に散布することで、十分な効果が得られます。

表1 ナカジロシタバに対するおもな登録薬剤(平成17年8月1日現在)

薬剤名	希釈倍数	収穫前日数-剤の使用回数	有効成分名-有効成分の総使用回数
オリオン水和剤40	1,000倍	前日-5回	アラニカルブ-5回
ラービフロアブル	750~1,000倍	3日-3回	チオジカルブ-3回
トルネードフロアブル	2,000倍	7日-2回	インドキサカルブMP-2回
トレボン乳剤	1,000倍	7日-3回	エトフェンプロックス-3回
ノーモルト乳剤	1,000倍	7日-2回	テフルベンズロン-2回
ディブテックス乳剤	700~1,000倍	14日-4回	DEP-4回
マッチ乳剤	2,000~3,000倍	14日-2回	ルフェヌロン-2回

※ 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法、注意事項等を確認のうえ使用してください。

野菜・花きを加害するオオタバコガについて

オオタバコガは、レタスなどの葉菜類、トマト、ナスなどの果菜類、キク、トルコギキョウ、バラなどの花き類など多くの作物を加害する広食性の害虫です。県内では、昨年、レタスなどの露地野菜で多発し、大きな被害が生じました。本年は、7月下旬現在、フェロモントラップによる調査で発生量は昨年並～やや多い状況です。例年9月から10月にかけて発生量が多くなりますので、今後の発生に注意が必要です。

1. 被害のようす

孵化直後の若齢幼虫は、新芽や腋芽、展開前の葉など柔らかい部分を加害します。3齢を過ぎている程度大きくなると、果菜類では果実に、レタスやキャベツでは結球部に、花き類では蕾や花に食入します。野菜類、花き類では、果実や蕾を次から次へと食害するため、幼虫の密度が低くても被害が大きくなります。また、レタスやキャベツでは、収穫時に食害の有無が外観からは判別しにくいいため、問題となります。

2. 形態及び生態

成虫の体長は15mm程度、羽を広げた時の大きさ（開張）は35mm程度、前翅の色は灰黄褐色です。成虫は夜間に活動し、若い葉の裏、花蕾または果実などに1個ずつ産卵します。幼虫は5～6齢を経て体長40mm程度まで成長します。幼虫の体の色は緑色から褐色までさまざまで、ハスモンヨトウやヨトウガなどの幼虫に比べ、体の表面のまばらに生えた毛が目立ちます。最終世代の老熟幼虫は土中で蛹化し、蛹態で越冬します。

卵から羽化までに要する期間は、25℃で約36日であり、高温時にはさらに短期間で成長します。第1回成虫（越冬世代）は5月下旬頃よりフェロモントラップに誘殺され、世代を重ねながら9～10月にかけて発生が多くなります（図1）。本県における年間発生回数は3～4回です。

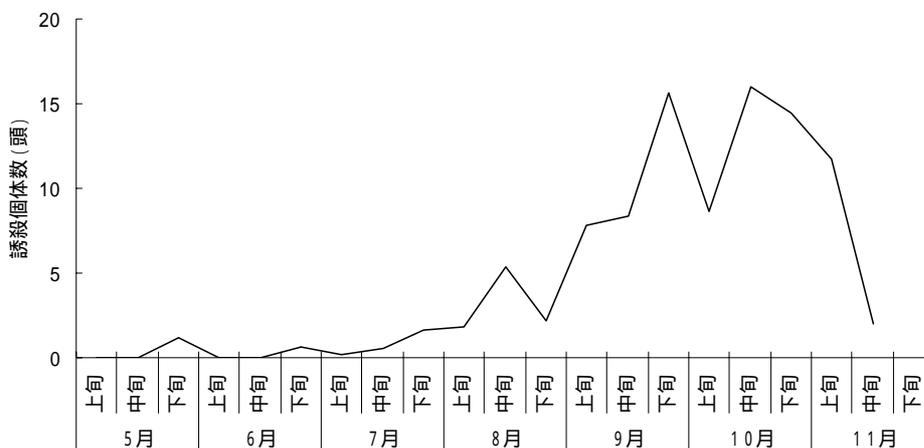


図1 フェロモントラップによるオオタバコガ成虫の発生活長（坂東市，平年値）

3. 防除対策

- 1) 圃場をよく観察し、幼虫の早期発見に努めます。新しい食害痕や虫糞の周辺に幼虫がいる可能性が高いので幼虫を見つけ次第捕殺します。
- 2) 果菜類や花き類では、被害果や摘芯・摘花した腋芽、花蕾等に卵や若齢幼虫がついている場合があるため、これらは株元に放置せず、ほ場外へ持ち出し土中深く埋めるなどして処分することが大切です。また、施設栽培では、開口部や出入り口を防虫ネットで被覆すると、成虫の侵入を防ぎ、高い防除効果があります。

- 3) 幼虫の齢期が進むほど薬剤に対する感受性が低下します。また、中齢幼虫になると蕾、果実や結球内に食入するため薬剤がかかりにくくなります。食入前の若齢幼虫のうちに防除を徹底することが重要です（防除薬剤は表1を参照）。
- 4) 秋冬レタス、キャベツなどの露地野菜の定植期（8月下旬～9月中旬頃）は、オオタバコガの産卵時期と重なります。また、結球前の葉に産卵された場合、結球後に被害が大きくなります。そのため、定植後～結球前の防除が特に重要であり、薬剤は発生状況に応じて葉裏や株元にもかかるよう丁寧に散布してください。
- 5) オオタバコガは多くの薬剤に対して抵抗性が発達しています。新たな抵抗性を発達させないため、薬剤を散布する場合は、系統の異なる薬剤をローテーション散布してください。
- 6) コナガコン-プラスは、オオタバコガに対する交信攪乱効果があり、成虫の発生前から栽培地域全体に設置（100～120本/10a）すると効果的です。ただし、本剤には直接的な殺虫効果はなく、密度が高くなると効果が不十分になるため、薬剤散布を併用することも大切です。

表1 オオタバコガに登録のある主な薬剤（平成17年8月1日現在）

系統名	薬剤名 (有効成分名)	作物名									
		レタス	非結球 レタス	ハクサイ	キャベツ	トマト	ミニ トマト	ナス	ピーマン	イチゴ	キク
カーバメート剤	ラービンフロアブル (チオジカルブ)										
BT 剤	エスマルク DF (BT)										
	ガードジェット水和剤 (BT)										
	センターリ顆粒水和剤 (BT)										
IGR 剤	アタブロン乳剤 (クロルフルアスロン)										
	カスケード乳剤 (フルフェノクスロン)										
	マッチ乳剤 (ルフェノロン)										
	マトリックフロアブル (クロマフェノシド)										
その他	アフアム乳剤 (エマメチン安息香酸塩)										
	コテツフロアブル (クロルフェナビル)										
	スピノエース顆粒水和剤 (スピノサド)										
	トルネードフロアブル (インドキサカルブ MP)										
	ブレオフロアブル (ピリタリル)										
(性フェロモン剤)	コナガコン-プラス	適用場所: コナガ及びオオタバコガの加害作物栽培地帯									

※農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法、注意事項等を確認のうえ使用する。

農薬登録速報（6月）の概要

平成17年6月期間中（6/1～6/30）に新規・変更登録のあった農薬は、以下のとおりです。なお、農薬の使用にあたっては、必ずラベル等を確認してください。

○ 殺虫剤・殺菌剤・殺虫殺菌剤・殺そ剤等

新規>サバクトップ，ブイゲットアドマイヤースピノ箱粒剤，ミドリヒメ，ライトニング，家庭園芸用オルトラン水和剤，家庭園芸用オルトラン粒剤，日曹ベフキノロン水和剤，粘着くん水和剤

変更>アントラコール顆粒水和剤，エルサン乳剤，エンバーMC，オキシンドー水和剤80，オルトラン水和剤，オンコル粒剤5，カルモック，キルパー，クミアイアタックオイル，コロマイト水和剤，サンマイトフロアブル，サンリット水和剤，スターナ水和剤，チューンアップ顆粒水和剤，ドキリンフロアブル，ネキリトンK，ネビジン粉剤，パノコン乳剤，ビームアドマイヤースピノ箱粒剤，ビームバシボン粉剤5DL，ブイハンターフロアブル，ブイボン乳剤，プリンスフロアブル，フルサポート箱粒剤，フローバックDF，ポリオキシシAL水溶剤「科研」，モンガリット粒剤，ラテラトレボン粉剤DL，リドミル粒剤2，家庭園芸用オルトラン水和剤

○ 除草剤等

新規>GF草退治H粒剤，GF草退治粒剤

変更>2，4-D「石原」アミン塩，ウィードコロシム粒剤，カーメックス-D，クサストップ1キロ粒剤75，グラスジンMナトリウム粒剤，ダイナマンD1キロ粒剤51，ダイナマンジャンボ，タケダ園芸草退治粒剤，タッチダウンiQ，トレディプラス顆粒，トレディワイド1キロ粒剤，ネコソギエースA粒剤，ベルベカット乳剤，マスターリー粒剤，ラウンドアップハイロード，レッドスターフロアブル，ワイドウェイE粒剤

○ 植調剤等

変更>トマトトーン

○ 展着剤等

変更>アビオン-E，まくぴか

○ 失効農薬

〔DIC〕プロハービー水和剤，アグリードコラトップグレータム粒剤，カダンCX，カダンG，クミアイスマッサ乳剤75，コラトップグレータム粒剤，シオノギ・コサイドDF，シマジン粒剤1，トモノスミロディー乳剤，トモノマラソン乳剤，バイエルヒノバイトレボン粉剤DL，ビームバシオフナック粉剤5DL，ヘキストバスタ液剤，ホクコーノンマイト水和剤，ヤシマノンマイト水和剤，ローム・アンド・ハースプロハービー水和剤，永光カルダ1キロ粒剤，永光サンシールドDF，永光ラクダープロジャンボ，三共オフナック乳剤，住化ノンマイト水和剤，日産フジワモンカット粒剤，日産モンカット粒剤，日曹ノンマイト水和剤，日農レグロックス，武田レグロックス，明治ハービエース液剤

※ 農薬の登録失効は、同一成分の農薬においても販売メーカー毎になりますので、ご注意願います。

病害虫資料室【今月号の病害虫から】

※病害虫防除所ホームページ上で、写真をご覧ください。
ホームページアドレス <http://www.jpjn.ne.jp/ibaraki/>

ネギ

ネギアザミウマ

発生生態と被害：成虫・幼虫は葉に寄生し、葉の表層組織を傷つけ、吸汁するため、加害部は白いかすり状の食害痕となる。被害がひどくなると、葉の緑色が失われ、葉全体が汚くなる。ネギの他、タマネギ、ニラ、アスパラガス、キャベツ、カーネーションなど、きわめて広範な植物に寄生加害する。本種は、主として成虫が植物体上で越冬し、春から徐々に密度を増し、特に梅雨明け後から盛夏にかけて発生が多くなる。夏季は約2～3週間で1世代を経過する。高温乾燥を好み、空梅雨や高温少雨の夏に発生が多い。

防除のポイント：発生初期からの防除を徹底する。葉に白いかすり状の食害痕が認められたときは、できるだけ早期に薬剤防除を行う。また、定植時や土寄せ時に粒剤を処理すると効率的に防除を行うことができる。雑草は、ネギアザミウマの発生源となるため、圃場周辺の除草を徹底する。

写真1：ネギアザミウマによるネギ葉の被害

写真2：ネギアザミウマによるネギ葉の被害（多発時）

写真3：ネギアザミウマ成虫

ネギハモグリバエ

発生生態と被害：成虫は葉の組織内に点々と産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜入して葉肉を食害するため、食害痕は白いすじ状となる。幼苗期に多発すると枯死株を生じ被害が大きくなる。越冬は蛹態で地中で行い、春から秋までに年間5～6回発生する。空梅雨だと発生量が多くなる傾向がある。

防除のポイント：生育初期の被害は、枯死だけでなく食入部分付近から葉の奇形を起こしたり発育の遅延を生じるため、多少でも発生の兆しがみられたら、早めに防除を行う。また、定植時や土寄せ時に粒剤を処理すると効率的に防除を行うことができる。

写真4：ネギハモグリバエ幼虫によるネギ葉の被害

写真5：ネギハモグリバエ成虫

IV. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 7月30日から8月29日)

気象庁(7月29日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	20	40	40
降水量	関東甲信全域	30	40	30
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並か高いでしょう。降水量、日照時間は平年並でしょう。

<1週目の予報> 7月30日(土曜日)から8月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

<2週目の予報> 8月6日(土曜日)から8月12日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並か高い

<3週目から4週目の予報> 8月13日(土曜日)から8月26日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並

V. テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

☆普通作物 029(226)5321

8月上旬 水稲病害虫の防除対策について

中旬 サツマイモ害虫の防除対策について

下旬 ダイズ病害虫の防除対策について(1)

9月上旬 ダイズ病害虫の防除対策について(2)

☆園芸作物 029(226)6131

8月上旬 果樹病害虫の発生現況と防除対策について

中旬 ハクサイ及びレタス病害虫の防除対策について

下旬 クリ及びカキの病害虫の発生現況と防除対策について

9月上旬 施設野菜病害虫の発生現況と防除対策について